

2つの世界で生きること ～ デフリンピックを通して ～

校長 早川 就

東京2025デフリンピックが閉幕しました。日本選手団は、金16を含むメダル総数51個と前回の30個から大躍進でした。また、本校卒業生が参加した男子サッカーは準優勝、バドミントンでは女子ダブルスと団体戦で優勝と大活躍でした。

約30年前私が初めて本校に赴任した頃は、ろう学校から大学に進学する生徒は極一部で、デフリンピック選手は地域の学校出身者ばかりでした。そこで私は、「聾学校で大学進学者とデフリンピック選手を育てる」ことを目標としてきました。今では聾学校からの大学進学もデフリンピック出場も珍しくありません。本校卒業生からもメダリストが登場したことは、今の子供たちにとって大きな励みになることでしょう。

さて、期間中私もかつての指導者としてバドミントン会場で応援しましたが、そこには選手である卒業生姉妹のご家族、同級生や関わりのある手話関係者・ろう者のほか、姉妹が小・中学部時代指導を受けた、地域のバドミントンクラブ監督がおられ、一緒に応援しました。試合中や合間の時間、当時の二人の様子やエピソードなど色々と聞き、とても勉強になりました。その監督やお母さんとの話から、聾学校やデフクラブのような「ホームグラウンド」を持ち、地域のクラブで「磨かれ、鍛えられる」ことの大切さを実感しました。地域の学校やクラブで過ごすのは、聞こえない・聞こえにくい子供にとって想像以上に大変なことです。本来ならば競い合い、励まし合う聞こえる仲間たちとの間には、歴然とした言葉と文化の壁があり、周囲が一体感を増せば増すほど、この壁はどんどん厚く高く感じます。そんな時、聾学校やデフクラブはホッと一息つける場所であり、そこにいる仲間は単純に競い合い、励まし合える貴重な存在です。姉妹のご両親は、本人たちがこの壁の前で何度もくじけそうになった時、しっかりと気持ちを受け止め、時にご自分も苦しみながら支えて来られました。そして、その苦勞を理解し、時に厳しく又暖かく姉妹を鍛え、技術を磨いてこられた監督とクラブの仲間たち、それらの環境に大きな意味があったように思います。

社会に出れば、誰もが聞こえる人に囲まれて生きていきます。だからこそ、幼い時にホームグラウンドを大事にして、周囲の大人からの支援を受けながら、少しずつ壁の乗り越え方を身に付ける。そうすれば、大人になってからも2つの世界を上手に生き分けられる。そんな姿を教えてもらったデフリンピックでした。

